



まったくもって個人的な話であるが、編集子は、学会誌である本誌（『精神神経学雑誌』）の編集委員のほかに、精神医学とは別の医学領域の某学術商業誌（以下、「某誌」と記す）の編集委員をしている。というか、していた。「していた」というのは、先日、「編集委員」から「編集顧問」となり、「委員」ではなくなったのである。某誌の編集委員には、1997年に前任者からの推薦を受けて就任したと記憶しているが、とにかく昔のことで記憶もあまり定かではない。某誌は季刊誌であったのと、出版社の懐事情もあって、編集委員会も2号分まとめて行っていたこともあり、年に2回程度の編集委員会が都内某所で行われていた（コロナ禍の後には、本誌と同様にZoomが多用された）。当時の某誌の編集委員長は、老年医学界の重鎮でもあったO先生、編集委員は編集子を含め6名程度であった。先日亡くなられたO先生は豪放磊落な方で、編集会議で次の特集案が出てこなかったときに、「酒でも呑んで良い案を出そう」と言って、出版社の社員にビールを注文させ、実際にビールを飲みながら議論したこともあった（本誌ではそのようなことはないの、ご安心あれ）。

某誌の編集委員会のお知らせは、いつもは電子メールで届くが、今年に入ってまったく連絡がなかった。編集委員長のO先生が亡くなられたことも関係しているのかと思いついて待っていると、なぜか電子メールではなく、某誌を発行する出版社からの封書が自宅宛に届いていた。電子メールから封書とは何という時代の逆行と思いついて開封してみると、「編集委員ご退任と編集顧問就任のお願い」と書かれた1枚の紙切れが出てきたのである。そのようなわけで、還暦を待たずして編集子は、某誌においては編集顧問なる名誉職(?)になってしまったのである。

以上の話をあちこちでしたり書いたりしていたら、先日、かつて本誌の編集委員を務めていたある先輩から、「とある精神科の雑誌（商業誌）は原則、本務が定年になると編集委員から編集顧問になると決めている」という内容のコメントをいただいた。政治家も企業のトップも辞め時を決めるのが難しいとされるが、辞め時のルールがあるのは有り難いのかもしれない。

さて、編集子の個人的事情の話題が半頁分ほど続き、すっかり前置きが長くなってしまったが、ここからが本題である。

すでにご存じの読者も多いと思われるが、本誌（『精神神経学雑誌』）のことで、編集委員にも、実は3年という任期がある（委員長、副委員長を除く）。3年で全員が入れ替わってしまうと、雑誌の連続性といった面などで、さまざまな問題が生じる可能性が高いため、実際には1年半ごとに半分ずつが任期満了となるかたちをとっている。

以前の編集後記（126巻10号）にも書いたが、1年半前は、働き方改革の1つとして、編集委員会の開催が平日の夜に移ったことから、多忙がゆえに参加できないという理由で、編集委員を任期満了もしくは任期途中で勇退なさった方がおられ、代わりに多くの若手の委員の先生方が加わり、委員会の平均年齢が下がった。今回は、2025年11月末までが任期の8名の委員の先生方のうち、5名が勇退なさり、新たに7名の先生方が委員に加わった。

7名の先生方のなかには、これまでの編集委員会には専門家といえる委員がいなかった疫学や統計に強い方もおられ、ますます盤石な編集委員会となった（はずである）。ちなみに、編集委員会の仕事というと、単に論文の査読と受理（アクセプト）と却下（リジェクト）の判断だけをしているだけと思われるかもしれないが、編集子がかかわってきた最近の7年間だけを見ても、倫理関連、著作権関連、オーサーシップ関連といったさまざまな問題に対応してきた。現在、突きつけられている問題として、ChatGPTに代表される生成AI（artificial intelligence）がある。これまでの問題とは異なり、相手（生成AI）は常に進化していく存在であるようなので、どのような対応をしていく必要が出てくるのか皆目見当がつかない（というより、対応策の斜め上に行くことが容易に起こりうると思われる）。これに関しては、アラ還委員よりも若い委員の先生方のほうが柔軟な対応ができそうである。

前回も書いたが、若い力がみなぎる「シン・編集委員会」となった本誌のさらなる発展にご期待あれ。

山田和男